

梅雨以降の大雨に対する技術対策

【普通作】

1 水稲

- (1) 深水状態が続くと軟弱徒長の生育となり、スクミリンゴガイの被害も多くなるため、除草剤散布時を除き、浅水～間断かん水管理を基本とする。また、有効茎が確保され次第、中干しを実施する。葉いもち発生ほ場では強い中干しは避ける。
- (2) 除草剤散布後、大雨によりオーバーフローした場合は、雑草の発生状況を確認し、残存雑草がある場合は、早めに中期除草剤での対策を行う。
- (3) いもち病の発生しやすい条件となるため、置き苗は早急に除去し、発生が認められた場合は直ちに防除を行う。粒剤は予防効果が主で効果発現まで時間がかかることがあるため、発生初期までに防除を実施する。
- (4) 大雨により冠水した場合には、早急に排水を図り、冠水時間を短くする。十分な排水ができない状況でも、葉の先端が水面から出るよう最大限の努力をする。排水後は、できるだけ早く新しい酸素を含んだ用水との入れ替えを実施する。

2 大豆

- (1) 排水対策を行い、播種作業ができる条件を整える。特に、排水が悪い部分は人力で作溝する等により、周囲溝、弾丸暗渠等の機械による排水作業ができるよう努める。また、排水口の整備を行い速やかな排水を図る。
- (2) 降雨の合間をぬって、ほ場の土壌水分が適度になったら播種を行い、7月20日までの適期播種に努める。適期播種には、組作業による耕起・播種や一工程播種が有効である。さらに、播種後の降雨対策として畝立て播種も有効である。
- (3) 播種後の冠水被害を回避するため、周囲耕や畝溝は必ず排水口まで整備し表面排水を徹底する。出芽苗立ちが不足した場合は、播き直しを行う。播き直しの判断の目安は7月末時点で健全株が全体の7割以下とする。